

氏名	박영순 朴令順
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第5号
学位授与日	平成23年9月15日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	主題としての「女性性」—出光真子とユン・ソクナム(尹錫男)、 そして筆者(朴令順)の作品をめぐって
審査委員	主査 武蔵野美術大学教授 戸谷 成雄 副査 武蔵野美術大学教授 田中 正之 副査 武蔵野美術大学教授 伊藤 誠 副査 栃木県立美術館学芸課長 小勝 禮子 副査 国際日本文化研究センター准教授 金 恵信

内容の要旨および審査結果の要旨

論文の構成と概要

本論文は、「女性性」と「母性」を主題とする作品を制作し続けている日本と韓国のふたりのアーティスト、出光真子とユン・ソクナムについての研究であり、また両者の作品との関連のもと論文提出者である朴さん自身の作品についても論じられている。出光とユンの作品において「女性性」や「母性」がどのように扱われ、表現されているのかを詳細に分析し、父権的社会のなかで構築される社会的制度としての「女性性」と「母性」に対する彼女たちの抵抗と解体の試みの軌跡を明らかにしたうえで、主体的で自らの内面から発したものである「母性」の表現の可能性を、論文と作品制作の両方に置いて探求したものである。また本論に対する補足として、朴さん自身が行った出光とユンへのインタビューが付されている。

本論部の主な構成は以下のとおりとなる。

序論

第1部 出光真子の作品研究

第1章 アーティストとしての背景と足跡

第2章 作品説明と理解

第2部 ユン・ソクナム(尹錫男)の作品研究

第1章 作品の背景そして彼女のフェミニズムの歴史

第2章 作品説明と理解

第3部 筆者(朴令順)の作品研究

結論

Appendix 1 : ユン・ソクナムと筆者のインタビュー

Appendix 1 : 出光真子と筆者のインタビュー

第1部では、出光真子がこれまで制作した17点の作品について分析されている。アメリカを代表するフェミニスト・アーティストであるジュディ・シカゴとミリアム・シャピロが学生たちとともに制作したインスタレーション的作品《ウーマンズ・ハウス》(1972年)の記録映像である出光の映像作家としての最初の作品に始まり、社会の中での女性の存在のありようを扱った《主婦の一日》(1977年)、歪んだ母性の問題を主題とする《英雄ちゃん、ママよ》(1983年)や「グレート・マザー・シリーズ」の諸作品(1983～84年)、女性がアーティストとなることの困難を描いた《加恵、女の子でしょ!》(1996年)、そして2005年の《直前の過去》まで、これらの作品についてこれまで書かれてきた批評を網羅的に参照し、また自身が出光に行ったインタビューから引き出した言葉にも依拠しながら検討を加えている。そうした分析を通して、出光の作品が社会的制度としての「女性性」や「母性」に対する強く鋭い批判的視点を持って制作されていること、そして社会における出光自身の居場所の問題が追及されていることが明らかにされている。

第2部では、ユン・ソクナムの作品が、前期、中期、後期に分けられて、第1部と同様に年代順に論じられている。ユンが女性問題に目覚めたばかりの頃に制作した平面作品《L婦人》(1985年)から「母親」を主題として取り上げるようになる1992年までを前期として扱い、椅子を主要モチーフとしてインスタレーション的作品を制作するようになる90年代を中期として扱っている。ユンの作品における重要なモチーフである椅子が持つ象徴的意味に関しては、とくにインタビューに基づいて詳細な議論がなされ検討されている。2000年以降の後期の代表作として取り上げられている《1025: 人とともに、あるいはともにする人もなく》の分析においては、社会制度的なものではない、女性固有の力としての「母性」の表現のユンによる探求が詳述されている。

第3部では、朴さん自身の作品について論じられている。2004年に制作された《考えの末》という母性と血液の循環とを象徴的に結びつけた作品から、社会における女性の存在を問題化した《彼女たちを呼び出す》(2010年)まで、朴さんの作品のなかでの「女性性」や「母性」の表現について論じられている。

結論部においては、出光やユンが主題として扱った社会制度的構築物としての「女性性」や「母性」についてもう一度整理がなされ、そのうえで、新たな、父権的社会のくびきを逃れた「母性」の表現を追求していく可能性について論じられている。

本論文の成果

本論文は、「女性性」、とりわけ「母性」や「母親」をテーマとする作家として国際的に活躍し、かつ現代を代表するふたりの作家の作品に関して、では実際に「母性」や「母親」といった主題がどのように表現されているのか、そしてまたその表現がどのように受容されてきたのか、を網羅的にかつ詳細に論じまとめあげたものとなっている。

出光とユンの作品の分析にあたっては、先行する研究論文や批評に依拠するだけでなく、朴さん自身が両アーティストに直接インタビューを行い、その成果に基づいてこれまでにない新たな作品解釈を展開している。この展は特筆すべきであろう。これらのインタビューの全文は Appendix として論文に付されており、出光とユンに関しての今後の研究に重要な貢献をなす成果となっているといえる。

ただし、公聴会においても指摘されたことだが、朴さん自身の作品は、必ずしもフェミニズム的主題のみに限定されるようなものではなく、土着信仰などより広い文化的文脈を含んだものとなっており、今後は、そのような広い文脈のなかで今一度自身の作品を捉えなおしてみることも必要であるように思われる。

最終試験と結論

2011年7月21日に、公聴会に引き続き最終試験と審査を行った。最終試験は論文提出者である朴さんに対して口頭で試問する形式によってなされた。質問は韓国語の日本語への翻訳において問題があると思われた数箇所についてなされ、適切な日本語の語句への変換が求められた。論文の内容に対しては、「母性」というものを朴さんがどうとらえているのか、という点を今一度確認する質問がなされ、社会的制度によって押しつけられたものではない主体的で自らの内面から発したものとしての「母性」の表現の可能性についての朴さんの考えが明快に回答された。

そのような表現の萌芽的なものを、朴さんはユン・ソクナムの作品《1025》に見ており、この作品の意義を自分なりに十分くみ取り消化したうえで、朴さん自身の作品《彼女たちを呼び出す》が制作されている。この関連性と朴さんの作品の質の高さとは、審査においても指摘され、先行作家の作品研究と自作の作品とが非常に生産的に融合し得た、高く評価されるべき博士論文（と作品制作）であると判断された。

審査においてはまた、朴さんの行った出光とユンへのインタビューの意義についても論じられ、批評家的な視点とは異なる作家らしい視点からの質問によって両作家の重要な証言を引き出している点、そしてこれらのインタビューが出光とユンに関しての今後の研究に多大な貢献をなす高い価値を有している点が指摘された。そのインタビューの成果を反映させてなされた綿密な作品分析は、博士論文にふさわしいオリジナリティーを持ち、高く評価されるものとなっている。

審査委員一同は、以上のような研究成果を認め、博士号の学位にふさわしいと判断した。



① 「疎通の跡」
2008年 設置可変 混合素材



① 「疎通の跡」
2008年 設置可変 混合素材



② 「私たちに整理がある」
2009年 設置可変 混合素材



② 「私たちに整理がある」
2009年 設置可変 混合素材



③ 「彼女を呼び出す」

2010年 1332cm×207cm×4cm (設置可変) 木の上に絵の具 パラフィン



③ 「彼女を呼び出す」

2010年 1332cm×207cm×4cm (設置可変) 木の上に絵の具 パラフィン